

蛙（ケクリ）池のトケビ

ある年の10月のことだった。

わたしが、村の仲間と酒をのんで、市場から帰るかえり道。月もなくって暗かった。ケクリ池のあたりまでくると、行く手に何かが現れて、またパッと消える。そしてまた、現れて、パッと消える。

わたしたちは、しばらく休んで、きせるで煙草をふかすことにした。ところが、また歩きだすと、そいつがパッと出たり、消えたりする。そうして蛇岩谷までくると、なにかが二匹、前を飛び交いながら行ったり来たりする。びっくりして大声をあげると、二匹が飛びかかってきた。

かろうじて、村の入り口にある家までたどりつくと、体がびっしょり汗でぬれていた。（語り手：南舜朝・1910生まれ）